

ギリシア喜劇断片 (一)

下 田 立 行

序

ギリシア喜劇の競演は悲劇に遅れること約五〇年とされ、最古の現存作品は前四二五年に上演されたアリストパネスの『アカルナイ人』である。喜劇的なものの萌芽はアテーナイ以外にもメガラ、スパルタ、南イタリアなど各地に認められるが、やはり残存喜劇及び断片は圧倒的にアテーナイ、あるいはアッティカ地方に集中している。アッティカ喜劇はおおまかに三期に分類され、前四〇〇年頃までを「古喜劇」、次いで三三〇年頃までを「中喜劇」、それ以降を「新喜劇」という。ほぼ完全な作品が残るのは古喜劇のアリストパネスと新喜劇のメナンドロスのみである。だが、知られている喜劇作者名、作品名、および名言集、辞典、文法書等に引用された断片は膨大な数にのぼり、語彙、文法、表現法、民俗、文化等を研究する上で好個の資料を提供してくれる。このギリシア喜劇断片の訳と注は、筆者が自分なりにそれらの断片を解読した成果を発表するものである。底本としては一九八三年以来現在まで五巻刊行されている最新のギリシア喜劇断片集成 POETAE COMICI GRAECI (PCG) を用いる。詳しくは本稿末尾を参照頂きたい。なお〔 〕は読者の理解を助けるための筆者による補完ないし補注である。

アガテーノール (前一世紀)

ΑΓΑΘΝΟΡ

アガテーノールについてはほとんど記録が残らない。僅かに刻文から彼がマイアンドロス河畔のマグネーシア市の喜劇詩人であり、前一世紀の初期にローマ祭の演劇競技で優勝したことがわかる。その刻文は以下の如くである。

喜劇詩人たちの中では

エペソスの人、アリストトーナクスの子アガテーノールが
劇『ミレートの女』で〔優勝〕。〔主演〕俳優は
ヒエロクレースの子ヒエロクレースであるが、実の父は
ピロータースで、トラッレイス族の出身。

【注】マグネーシアーと呼ばれる都市は古代小アジアに二箇所あり、一方がこのマイアンドロス河畔のマグネーシアー、他方がヘルモス河畔のマグネーシアーである。なお、ギリシア本土の地方名であるマグネーシアーとは異なる。

ローマ祭 (Ludi Romani) はローマの造営官によって九月四日から一九日にかけて催された、剣奴の戦い、猛獣狩り、演劇などを含

む祭（ローマでは市民が体育競技に参加することは一般になく、これはギリシアのさまざまな競技祭との大きな違いとなっている）。たんに大祭（Ludi Magni）とも呼ばれるローマ祭はそうした祭の中でも歴史の古いものであり、伝承では前三六六年から毎年行われたとされる。

トラッレイスはビザンティンのステパノス及びリウウスによるとイリュリアーの、ヘーシユキオスによるとトラキアーの一部族。今日でも両論がある。

刻文出典からマイアンドロス河畔のマグネーシアーの劇詩人及び役者たちがローマ祭で前一世紀初頭に優勝したことがわかる。アガテーノールには「エペソスの」という形容が付けられているが、エペソスとマグネーシアーは直線距離で二〇キロほどしか離れていない。彼とマグネーシアーの役者たちとの関係についてはいろいろの推測が可能であろう。また、役者のヒエロクレースについては「実の父は」としたのは原文 *phosei* で、「生まれは」の意味から実父を指す表現となり、*phosei* が「養子縁組によって」の意味から養父を指すのと区別される。したがって役者ヒエロクレースはピロータースを父として生まれたトラッレイス人であるが、ヒエロクレースの養子となってその名を継いだものと考えられる。劇『ミレートスの女』（*Melyta*）とあるのがアガテーノールのものとして残された唯一の作品名である。ただし、劇作品そのものの断片は残存しないし、内容も知られていない。だがミレートスは、遊女から身を興して名家に取り入り、成り上がったタルゲリアー、アスパシアーなどを頂点とする同業の女性たちが輩出した土地としての評判が高かったこと、中・新喜劇ではトピックもしくは登場人物として遊女が恰好の材料としてしばしば取り上げられていること、を考え合わ

せると、「ミレートスの女」がどのような女性であったか、ごく大まかな推測は可能かもしれない。ピレーモン III（前二世紀）。ローマの喜劇詩人プラウトゥスにも影響を及ぼした前三六一頃〜二二六の新喜劇詩人ピレーモン及び、前三世紀の新喜劇詩人小ピレーモンと区別して III とする）が同名の喜劇を、前三七五頃〜二七五頃の中喜劇詩人アレクシスが『ミレートスの女』あるいは『ミレートスの人々』という作品を書いている。アレクシスの作品についてはアテーナイオスが言及しているが、題名がそれぞれ女性単数形と男性複数形で書かれているので、別個の作品が存在したのか、どちらかがアテーナイオスもしくはその伝承の過程に生じた誤記なのかかわからない。

アガトクレース（前二世紀）

ΑΓΑΘΟΚΡΗΣ

アガトクレースに関する言及としては刻文に次の二つのものが残る。すなわち、レーナイア祭で優勝した劇詩人たちを記録した刻文の一つにアガトクレースの名があり、その前に「エム」メニデース、アリストーン、ノーウイオス、ディオニュシオス III が連なり、後にアルキクレース、ピオットス、ニコデーモスの名が続いている。また、ディオニュシア祭で上演された喜劇を記録した刻文には、

アガトクレースが『ホモノイア（和合）』で「五等入賞」

役を演じたのはニコラーオス

とある。ホモノイア *Homonoia* は和合、協調といった意味であるが、この喜劇の内容は知られていない。

アルカイオス (前五/四世紀)

ΑΚΚΑΙΟΣ

『スーダ辞典』α一二七四に、

アルカイオス。ミュティレーネー人、後アテーナイ人。古喜劇詩人で五番目の人。ミッコスの子。一〇篇の劇を書いた。

とある。喜劇詩人アルカイオスがミュティレーネー人とされているのは同名の有名な抒情詩人、ミュティレーネーのアルカイオスとの混同であろう。同様の混同がエピグラム詩人、メッセーネーのアルカイオスにも起こっていると思われる。「五番目の」とあるのは同名人物を区別するためとする解釈が一般的であろうが、古喜劇詩人の中で五番目なのか、他のジャンルも含めて五番目なのか疑問が残るし、いづれにせよ不明瞭で、「五番目の」を削除する版もある。『スーダ辞典』で一〇篇とされる喜劇のうち八篇の題名が知られている。以下列挙すると、『誘惑される姉妹』『ガニユメーデー』『エンデュミオン』『聖婚』『カリストー』『悲喜劇』『パライストラー』『パーシバエー』である。

『誘惑される姉妹』

ΑΛΕΞΑΦΑΙ ΜΟΙΧΕΤΟΜΕΝΑΙ

『姉妹』*Ἀλεξάφαι*という題名の喜劇を書いたギリシアの作家にアンティパネースと無名氏があり、同意のラテン語 (*Sorores*) の

喜劇を書いた作家にはアフラニウスとラベリウスがおり、プラウトゥスは『二人のバッキス』(冒頭散逸)という、姉妹を題材とした劇を書いている。また、『間男たち』*Μοιχοί*という題名ではアミシアース、アンティパネース、ピレーモンが書いている(これも散逸)。なお、モイケウオメナイ (*Μοικευσόμεναι*) という語はモイケウオーという動詞の受動態現在分詞女性複数主格で、この動詞は能動形で男が女と不義密通をするという意味で用いられる。したがって女性が主語の場合には受動態になって「誘惑される」「間男する」「密通する」の意味になる。ただし、内容はわかっていないので正確な解釈はできない。本劇からはイアンボスが一行のみアテーナイオスに引用されている。

—

愚かで〔なく〕、蝟の心を持つ……

〈出典〉アテーナイオス七・三一六B。

【注】本断片は不定法句で不完全な文である。(なく)は後述のように前行に否定詞が含まれているものとして訳した。形容詞の形から「愚かで〔ない〕」とされる人物が単数であることはわかるが、男性か女性かはわからない。ところで「蝟の心」とは何を指すのか、アテーナイオスは引用部分の前後で蝟に関する蘊蓄を傾けているが、中でもエウポリス『世間の人々』(散逸)からの引用は「行状が蝟のごとき市民」とあり、「狡猾で捉えどころがない」の意味に解されている。これは蝟が居場所にに応じて色を変えることからきており、

アテーナイオスは二二・五一三Bでも、ピンダロスからの引用として、「わが子よ、どの国を訪ねるときも、心はできるだけ岩場に棲む海の生き物（蛸）の色に如くあれ。居合わせた人にすすんで賛同し、その場その場で臨機応変に考えるがよい」（断片四三スネル）という詩句をあげ、さらにソポクレーズ『イーピゲネイア』（散逸）からの引用として、「多足の生き物（蛸）が岩に依りて色を変えるように、男の前では本当の心の色を変えるように心がけるがよい」（断片三〇七）という詩句を引いている。また作者不明のダクテュロス（長短短六脚韻）に「わが子、英雄アムピロコスよ、どうか蛸の心を持ち、だれであれ土地で付き合う人々に合わせるようにせよ」とあるように、「蛸の心」とは変幻自在、臨機応変、悪くいえば抜目なくする賢いことを意味するようである。しかしこれらの引用ではこの言い回しがどちらかといえは善い意味合いのものとして積極的に使われているので、「愚かな」という形容と符合しないとも考えられるため、前行に否定詞の「*μή*」が含まれていたとする説に従った。

『ガニユメーデース』

ΓΑΝΥΜΕΔΗΣ

同名の劇をアンティパネースとエウブローロスが書いている。ガニユメーデースはいうまでもなく、その美貌のためにゼウスに愛されて驚にさらわれ、ゼウスの酌人となって寵を受けたとされる神話上の人物。なお、一言つけくわえるなら、英語の *catamite*（稚児）はガニユメーデースのラテン語形である *Catamitus* から派生したといわれる。残された僅かな断片から内容を推測することは難しい

が、ゼウスの王宮を舞台とし、ガニユメーデースはもちろん、ゼウス、ヘーパイストス、ヘーラーなどが登場したと推測され、部分的には卑猥な要素もある、神話伝説をもじったバーレスクの類いの喜劇であったと思われる。

二一

A、熱い二度焼きも。B、二度焼きとは何のことだ。

A、贅沢なお菓子のこと……

〈出典〉ポルックス七・二三。アテーナイオス三・一一〇A。ただし、この箇所でのアテーナイオスの引用の仕方には混乱があって、どこまでがエウブローロスからの引用でどこからがアルカイオスからのものかはつきりしない。そのため種々の説が出されているが、決定的なものはないようである。しかし、後二世紀のポルックスもアルカイオスからとして引用しているので、一応アルカイオスの作としておいてよいであろう（アテーナイオスは後二〜三世紀）。

【注】「二度焼き」とは△二度火を通した△の意で、語源的に二度焼いたの意であるフランス語の *biscuit* や、ドイツ語の *Zwieback* に対応する表現。もつとも、これらはイタリア語の *biscotto* に溯るとされる。また、英語の *rust* が本来薄く切ったパンをオーブンで焼いたものであるのとはほ等しい。上述のとおり、アテーナイオスによるとエウブローロス（前五世紀）も同名の劇でこの菓子に言及している点に注目される。

三

片跛め、もつと急げ、さもないと雷をお見舞いするぞ

〈出典〉『反アッティカ主義辞典』「カタコーレ (*katáxole*) [カタコーロスの呼格]。アルカイオスが『ガニューメーデース』で。すなわち、ゼウスがヘーパイストスをからかって【本断片】という」。

【注】カタコーロスなる形容詞は稀語、恐らく出典はこのみ。コロス (*kolos*) は「跛の」あるいは「跛者」を意味するが、これにカタを加えて強意としたと考えられる。ただし、原典そのものを疑う学者もいて、*tréxe kolé*と校訂する説がある。これはカタコーロスなる語が他に見られないことと、「もつと急げ」と訳した部分が直訳では「より早く」の意の副詞であるためトレケ「駆けろ」を補ったもの。他に、先行する行の末尾に大胆な補訂をなす説もあるが必ずしも説得力があるとは思われない。

とりあえず、出典の意を汲めば内容的に特に不自然な点はない。ゼウスがその武器として雷を用いることも、ヘーパイストスが跛者であることも、ギリシア神話ではおなじみのテーマである。ゼウスが鍛冶の神ヘーパイストスに何かを命じ、いささか乱暴な言葉で急がせているのか、あるいはヘーパイストスがなにか不始末をしてゼウスが怒りのあまり退去を命じたものか。

四

どうも四十雀が、
ことを妨げているようだ。

〈出典〉ポージェイオス α 五〇九「アイギタッロス (四十雀)。物事を妨害する鳥。アルカイオスが『ガニューメーデース』で【本断片】と。アクセントはアリュバッロス「信玄袋、巾着」と同じ」。

【注】「四十雀より大胆な(あつかましい)」という俚諺が一五世紀の俚諺収集家アポストーリオス一・七六に残っているが、そこでこの形はアイギターラスであり、アポストーリオスが範としたと思われるアイリアーノス『動物誌』三・三九ではアイギテラーラスとなっていてこれはアイゴテラーラス「ヨタカ」と解されている。アポストーリオスがアイリアーノスを下敷としていることは、諺の説明明文がアイリアーノスとほぼ完全に等しいことから確かだと思われる。いずれにせよ、単語の類似から混乱が生じている。この俚諺の説明文は「ヨタカ」ないし「四十雀」が山羊を攻撃してその乳を吸うというもので内容的に面白いものだが、四十雀が「物事を妨げる」ことと明白な関連があるとも思われないので割愛する。「こと」と訳したブラーグマ、ポージェイオスの出典中の「物事」と訳したブラークシスには性的な含意がある場合がある。

五

I 《エベンソン *ἔβενσον* [εἰπτοῦ *νίπτου* 「落ちる」のアオリスト] は特殊である。なぜなら、第二アオリストが *-ου* で終わる音節の前に *ο* を持つことは決してないからである……ヘーローディアーンスは、これと似た俗語、すなわち、エケンソン *ἔκεσσον* [「ケゾー *κέζω*」排便する] の第二アオリスト] があり、これも *-ου* で終わる音節の前に *ο* があると述べて、アルカイオスの『ガニユメーデース』の次の用例を挙げている。「ネーレウスの娘に糞をひっかけて (カテケンソン *κατέκεσσον*)」。

II 《エベンソン。-ου で終わる第二アオリストで *ο* の前に *ο* を持つものではなく、エベンソンだけが例外である。なぜなら、喜劇詩人アルカイオスの『ガニユメーデース』で使われている「カテケンソン」は他のギリシア人の用法にもなければ、なにかの類推で生じたものでもなく、喜劇用に造語されたものだからである》。

III 《アルカイオスの『ガニユメーデース』で俗っぽい調子を出すために使われている「ネーレウスの娘に糞をひっかけて」という表現は喜劇調である。アリストパネースがどこかで、ケサイ *κέσαι* (第一アオリスト不定法) というべきなのにケセイ *κεσειν* (第二アオリスト不定法) といったのに等しい》。

〈出典〉 I コイロボスコス (後八〜九世紀) 『テオドシオス注解』。

II ヘーローディアーンノス (後二世紀) 『特殊語彙』。III 無名氏 『ホメーロス品詞分析』。

【注】笑いをとるための排泄関連語彙は喜劇の世界では頻用され、アリストパネースにも多い。思索に耽ってぼかんと口を開けているソークラテースにヤモリが糞を垂れかけた (『雲』一七三) などはその好例である。本断片で排泄に性的含意があったかどうかはわからない。

六

I 《バシリッサ *Βασιλίσσα* 「王妃」。アルカイオスが『ガニユメーデース』で、アリストテレースが『ホメーロス問題』で (使用して *ειν*) 》。

II 《古人はだれもバシリッサとはいわず、バシレイア *βασιλεια* またはバシリシ *βασιλις* といった》。

III 《喜劇詩人アルカイオス、及びアリストテレースが『ホメーロス問題』で、この語を使用しているということである。だが、君は『ネアイラ告発』の筆者 (デモステネース五九・七四) を最も偉大な証人として挙げてくれた》。

〈出典〉 I 『反アッティカ主義辞典』 II III プリュニコス (後二世紀の純正アッティカ主義者)。

【注】「王妃」を指す語の語形の問題であるが、バシリッサは他にクセノポーン『家政学』九・一五、テオクリトス『牧歌』一五・二四などに使われている。なお、エウスターテイオスが『オデュッセイア注解』で《知っておくべきことは、バシレウス「王」の女性形は、ヒエレウス「神官」のそれがヒエレイアであるごとくバシレイ

アのみではなく、アイリオス・ディオニューシオスよるとアッティカ方言でバシリッサという形も存在することである。彼がいうには、メナンドロスがバシリナ *Basilinna* という語を用いているそうである」と述べている。ゼウスの王宮を舞台としたこの喜劇で王妃と呼ばれるにふさわしいのはゼウスの正妻ヘーラーであろう。ギリシア神話上ゼウスの女・稚児狂いは毎度のことであり、ヘーラーはその度に嫉妬して夫の恋愛遊戯の阻止を謀ったり、相手を迫害したりしたことになるので、断片四で「こと」を妨げている四十雀も実はヘーラーを暗に指したものでないかと想像される。

七

《カコテクニゾン *kakotekhuzōn* 「卑怯な手段を弄する、惑わす」。カコテクノーン *kakotekhōn* の代わり。アルカイオスが『ガニヌメーデース』で》。

〈出典〉『反アッティカ主義辞典』。

【注】このままの形でアルカイオスが用いていたとすればカコテクニゾンは現在分詞男性形単数であるから、分詞の主語はヘーラーに隠れてガニヌメーデースと関係を結ぼうとするゼウスである公算が高からう。この台詞の発言者がゼウスの行為に対して批判的なヘーラーである可能性も否定できない。

八

《クレマソー *kremaōsa* 「吊し上げてやるぞ」。〔クレマンニューミ *kremannyumi* の未来形〕はクレモー *kremaō* はかりではない。アルカイオスが『ガニヌメーデース』で》。

〈出典〉『反アッティカ主義辞典』。

【注】「吊し首」はいらまでもないが、「吊し上げる」ことは懲罰の方法であり、従って脅し文句に使われた。『イリアス』八・一九以下ではゼウスがオリュムポスの神々すべてに対する脅しのためにこのやり方に言及している。従ってここでもこの言葉がゼウスによつて発せられた可能性は高いが、その場合相手がヘーラーか、断片三でも脅し付けられているヘーバリストスか、あるいはその他のだれか断定はできない。

九

《君は……大酒呑み（アツリュトモポテース）だが楽しい呑み仲間（ポティコス）ではない。アルカイオスが『ガニヌメーデース』でそのような酒呑みをポティコスと呼んでいる》。

〈出典〉アテーナイオス一〇・四四五DE。

【注】アツリュトモポテースはリュトモス、つまり規律のない酒呑

み、すなわち酒乱家である。ポテース、ポティコスともにポーノー「飲む」の派生語である。

『エンデュミオン』

ENATMION

月の女神セレネーに愛された美少年エンデュミオンの神話はすでにヘシオドスやサッポーにも反映している。本劇はエンデュミオンが本人またはセレネーの願いによって永遠に眠り続けたことを一種の病氣とした点に笑いの一要素があったらしい。これも神話伝説に基づくバレースクの類い。

一〇

私はほとんど丸三ヶ月近くの間、
エンデュミオンを見守っているので……

〈出典〉プリスキアース『文法教程』一八・一八〇。

【注】通常の神話からエンデュミオンは眠っているものと思われる。だが、彼を見守っているのが誰かははっきりしない。セレネー、または「眠り」の神、断片一から登場人物の一人として推測される医者などが考えられる。一行目、*oxēōu ti to ēnyēs* とがここではほぼ同意味の副詞(句)であるために、前者を *yēpouza* 「年老いた」(エンデュミオン)にかかる形容詞)や、一行目冒頭の三語を *oneuporopouza* 「夢見る」などに校訂する説、あるいは後者

を *hōn* 「既に」に校訂する説が出されている。

一一

《他にも(ゴルギアースが)いる。すなわち医者で、この人についてはアルカイオスが『エンデュミオン』で言及している》。

〈出典〉アリストパネース『鳥』一七〇一への古注。

【注】『スーダ辞典』θ二五八はゴルギアースをテッサロスの子で有名なヒッポクラテースの孫としている。「他にいる」というのは、プラトーンの『ゴルギアース』の登場人物として有名なソフィストの他にどう意味である。だが、医者のゴルギアースについてはこれらの言及以外知られていない。

一二

一タラントンの病の数々

〈出典〉ポルックス九・五三「クラテースの『向こう見ず』にある……「一タラントンの」*talantatos* (クラテース断片三六)という語は、喜劇詩人アルカイオスの【本断片】と同様、値段をいうのか重さというのか不明である」。

【注】タラントンは本来重さの単位であるが、貨幣の基準としても用いられた。一タラントンは重さの単位としては約三〇kg、貨幣価

値としては六〇〇ドラクメーに当たり、これはかなり高額である。ポルクスは、「一タラントンの」という形容詞が重さを指すのかわからぬから、この断片を引用している。断片一からわかるように『エンデユミオン』にはゴルギアースという名の医者が登場したので、今日この形容詞は治療代として医者に支払う額と関連すると見る説が有力である。コックは読み少々変更を加えた上、「エンデユミオンの病気についていたもので、その治療のために呼ばれたゴルギアースが一タラントンもかからないような軽い病気だ、といっている」と穿った見方をしている。

一三

私は仕えていた。

〈出典〉『反アッティカ主義辞典』。

【注】出典は複合動詞のアッティカ方言における未完了過去の形態について述べている。

『聖婚』

IEPOZ FAMOZ

マイネーケによると、ヘーラーとゼウスの婚礼を人間の流儀で表現したものとされる。

一四

五人の奴隷と一对の仔牛

〈出典〉ポージェイオス四七九・四「*κατα*」は牛にも使われる「普通は仔馬を指す」。アルカイオスが『聖婚』で【本断片】と。

【注】結納の一部、あるいは「聖婚」の儀式に必要な道具立てと思われる。

一五

彼らは混ぜ合わせ、隠し……

〈出典〉アテーナイオス一〇・四二四E。

【注】これは「聖婚」の儀式での儀礼を指すものと思われる。「隠す」がわかりにくく、「漉す」「汲む」などに校訂する意見がある。

一六

〈ケルニボン、ケルニビオン、ケイロニプトロン、ケイロニバナどきまざまに呼ばれる、手を洗う水を入れる器との関連で）たいいていの用法では「手水」というのが慣例である。アメプシアースが『投石器』（断片二〇）で、アルカイオスが『聖婚』で、用いてい

るように。』

〈出典〉アテーナイオス九・四〇八E。

【注】これも儀礼の一部からきたものであろう。引用のケルニボン等は器そのものを指す名詞であるが、「手水」は直訳では「手に水を」または「手に注ぐ水」となる三語がそのための器の意味で用いられ、しかもそれがもつとも普通の言い方であったと解説されている。アテーナイオスはさらに「手に」だけで同様の意味を表す例も挙げている。

『カッリストー』

KALISTO

カッリストーは神話ではリュカーオンの娘が有名であるが、同名の遊女の名かもしれない。本劇がリュカーオンの娘カッリストーにまつわる神話伝説をもじったバーレスクであるか、風俗喜劇であるか、断定する材料はない。だが、狩りのテーマが見えることから（断片一七）処女神アルテミスに従うニンフであったカッリストーの伝説が少なくとも背景にはなつていたと推定される。同名の悲劇をアイスキュロスが、喜劇を恐らくアムピスが書いたとされる。

一七

A、何ゆえ細なコエンドロの実を？ B、私たちが捕えた野兎の肉に、あなたが塩（と一緒に）ふりかけるために……

〈出典〉アテーナイオス九・三九九EF「ナウシクラテース（断片二）は……アッティカ周辺では野兎がめつたに見つからないといっている……が、アルカイオスは『カッリストー』の中で、次のようにいって野兎が沢山いることを証している。【本断片】」。

【注】「野兎」と訳した語はダシュプースで、本来「毛だらけの足」の意味。学名は *Lepus timidus* や *Lepus cuniculus*（アナウサギ）と区別される。コエンドロについては、プリーニウスが『博物誌』二二・二一八で「M・ウアローは、磨ったコエンドロ、ウイキヨウ、および酢を加えることにより、暑い時期でも肉を少しも傷めずに保存できる、と考えている」と述べている。コエンドロはセリ科の草で医療・調味用に用いられる。引用が不完全なのでコエンドロをどう用いるのかはつきり出ていないが、塩などとともに保存と調味のためにコエンドロの実を用いることをいったのだと思われる。話者を狩の準備をするアルテミスとその従者たちの一人（恐らくカッリストー自身）とする意見がある。

一八

《「番わせる」βγαίνω。「交尾する」ὄρεταιの意味で。アルカイオスが『カッリストー』の中で人間について「用いている」》。

〈出典〉『反アッティカ主義辞典』。

【注】一般の神話では、カッリストーは処女神アルテミスの従者で

あつたにもかかわらず、ゼウスに愛されて身ごもつたため、アルテミスは怒ってカッリストを熊に変じたとされる。従つてこの断片のような表現が用いられても不自然ではない。

『悲喜劇』

ΚΝΜΙΔΙΟΤΡΑΓΩΔΙΑ

同名の劇をディノロコスとアナクサンドリデースが書いている。ローマの喜劇詩人プラウトウスは自分の作品を *tragicomoedia* と呼んだ(『アムピトリュオン』前口上五九)。内容はわからないが、都市で行われる祭が舞台となつていたようである。

一九

わたくしは田舎からチーズを携えて

十二神の祭礼にやつて参りました。

大勢の人間が輪になつてるのが高みから見えます。

〈出典〉マクロビウス『サートウルナリア』五・二〇・一一「ガルガラ Gargara (ウエルギリウス『農耕詩』一・一〇三)が莫大な穀類の宝庫であつたことから、何かあるものが大変な量であることを表現するとき大きな数字の代わりにガルガラといったのである。その証人はアルカイオスで、彼は『悲喜劇』の中で次のようにいつている。【本断片】。ご覧のとおり、彼は明らかにガルガラという語を量の代わりに用いつているし、アリストメネースも『さまざまな話』(断片一)の中で同様に用いつている」。

【注】本断片は、一行目「チーズ」、二行目「十二神」と訳した部分が壊れているらしく解説不能なため、それぞれヘルマンおよびコックの校訂にしたがつて訳した。他の試みもあるが一々あげない。

ガルガラはすでに『イーリアス』八・四八でガルガロン(もしくはガルガロス)の形で現れるが、そこでは小アジアのイーダ山脈の尾根の頂点(今日の Baba Dag)を指す。これが後には同山脈のアイオリス系の都市ガルガラに名を与えたといわれる(ストラボン『地誌』一三・五八四)。ただし、大量、多数を意味する普通名詞のガルガラが地名のガルガラから来たとするマクロビウスの語源解釈は牽強附会の説であろう。Blebeを意味するこの語の使用は専ら喜劇詩人に限られている。類似の語はバルト語派によく見られるという(Chantraine: *Dictionnaire étymologique de la langue grecque*, p.211)。

二〇

彼は口に真鍮をかぶせ、喉を(膨らませて)笛を吹いていた……

〈出典〉ポルティオス *ε* 一七九四「真鍮をかぶせた口。笛の吹き手の口をいう。轡を着けるためである。アルカイオスが『悲喜劇』で【本断片】と」。

【注】エピカルコス *ἐπιχαλκος* という形容詞について、ヘーシユキオスも同様のことを述べている。一応真鍮をかぶせたと訳しておいたが、笛の吹き手は音の調整のために口に革製の轡のようなもの

をはめたらしい。この道具に補強のためもあって真鍮か銅などの装飾が施されていたかもしれない。原語のエピカルコスは「銅、真鍮、青銅などをかぶせた」というのが本来の意味で、楯などの形容に使われるが、それが装飾だけでなく補強のためであることを思えば、ここではあるいは「鍛えた」口と喉というほどの意味かもしれない。

「喉」(レーキユトス)については、プラトーン『少ヒツピアース』三六八Cへの古注に「喉元と頸(の付け根)の中間の、声を発する部分もレーキユトスという」とあり、クレアルコスの断片一〇九Wが引かれている。このことからマイネーケは、この箇所付近にレーキユトスにかかる、例えば、「膨れた」といった形容詞があったものと推測している。

二二

《リュシアースは「大食いの三段撓船」といい(断片一〇三S)、ピリストスは「大食いの五十權船」という(五五六F六八Ja)。「値引きをしない」とか「出費のかさむ」船という意味であろう。ホメーロスによれば「日頃腹一杯食っている」(『イーリアス』五・二〇三)、成長した競争馬からの転化でいわれるようになったらしい。アルカイオスは『悲喜劇』の中で、油をたくさん食うランプを「大食いの」と形容している》。

〈出典〉ハルポクラティオン一〇・二。

【注】リュシアースは前五世紀アテーナイの弁論家、ピリストスは五〜四世紀の歴史家。「油をたくさん食う」とした箇所はアリスト

パネース『雲』五七の、「飲兵衛のランプ」からとったもので、これもまた比喩的表現である。

『パライストラ』

ΠΑΛΑΙΣΤΡΑ

ブラウトウスの『綱曳き』とルーキアーノスの『ルーキオスあるいは驢馬』では、パライストラは遊女の名である。しかし、この劇で題名が遊女の名であるか、その普通名詞の意味である格闘場であるかはわからない。『格闘場』という題名も『粉碾場』とか『風呂屋』などという題名が知られているので不自然なことではない。だが、断片二三などから、遊女らしきものが登場するように思われるし、断片二二の話し手は奴隷女のように思われ、二四、二五では食べ物への言及があるなど、いずれにせよ風俗喜劇的な内容のものであったらしい。

二二

ご主人がおいでですから。私がちょっと文句でも言おうものなら、あなたに話したこのために、わたしは鼠の子よりも……

〈出典〉アテーナイオス九・三九六C「アルカイオスが『パライストラ』で【本断片】と」。

【注】鼠を豚に校訂する説もある。マイネーケは「ひどい目に遭うでしょう」といった言葉が続いていたと考える。

二二三

彼女は〔その女に〕香油を塗ってから、自分の代わりにこっそり〔男と〕一緒に閉じ込めた。

〔出典〕アテーナイオス一五・六九一B「そのような香油を塗ること(クリーサスタイ)をアルカイオスは『パライストラ』の中で次のようにミュリススタイといっている。【本断片】」。

【注】マイネーケは二行目を「一緒に寝かせた」と校訂し、自分の代わりに別の女を男客にあてがおうとした遊女のこと、と考える。ここでの香油の使用法に関して参考になる例は、アリストパネース『女の議会』五二四〜二六、妻の不倫を疑う夫ブレピュロスとブランクサゴラーの会話にみられる。「ブランクサゴラー…わたしの頭から香油の薫りがするのならね。ブレピュロス…なに？ 女は香油をつけていないとあれをやらせんというのか？ ブランクサゴラー…わたしはさせないわ、お気の毒さま」。同『女の平和』九三八以下からも、房事に際して香油を用いること、またそれに適合する香油があったことが窺える。

二二四

すでに土鍋に一杯のキャベツを煮ていた

〔出典〕アテーナイオス九・三七〇F。

二二五

〔肝〕という言葉はアリストパネースが『揚げ物屋』(断片五二〇・四)で、アルカイオスが『パライストラ』で、エウブローロスが『デウカリオン』(断片二三)で用いている。

〔出典〕アテーナイオス三・一〇七F。

【注】「肝」とした *hēparion* は *hēpar* 「肝臓」の縮小辞。食用としてのそれであることはアテーナイオスやアリストパネースの文脈から明らかである。

『パーシパエー』

ΠΑΡΣΙΠΑΗ

アリストパネース『福の神』の古伝梗概から『福の神』と同じ前三八八年に上演されたことがわかる。

パーシパエーは周知のとおりクレタ王ミーノースの妻で牡牛を愛し、牛と人の合いの子ミーノータウロスを生んだ。パーシパエーには魔法の力があり、ミーノースが他の女と交わるとその胎内に毒虫を発射し、そのために女が死んだ、という話も残っている(アポッロドーロス『ギリシア神話』三・一五・一)。同名の劇は悲劇喜劇を通じて知られていない。やはり伝説をもじったパーレスクであろう。

二六

では、彼(女)が町に住んでこれからは品よくなるよう……

〈出典〉『ギリシア文献集』。

二七

また、ゼウスにかけて家にある他の什器類を……

〈出典〉ポルックス一〇・一一「(エピプラ *ἐπιπλά* (道具、食器など)について)これをオイケーテリーア・スケウエー *οἰκητήρια οὐκείη* ともい……詩人アルカイオスが『パーシパエー』で【本断片】とっているから」。

【注】什器類と訳したスケウアリアはスケウエーの縮小辞(ともに複数形)。

二八

ミーノースの妻を? いや、転げ回って己の身を嘆くがいい……

〈出典〉Lex. Mess. 「*μ*のある *Μινωας* (王格)や *Μινωαια* は [*Μίνωας* からの] 派生語であり、変わった島名 *Μίνωαια* もこれと

同じ終わり方をする。「ミーノース」という意味の)形容詞だからである。*α*の短音化のためにアンティバエヌルティマ(後ろから三つ目の音節)に鋭アクセントがおかれるべきことは強調しておく必要がある。例は、エウポリスの『徴兵忌避者』(断片二八)……アルカイオスの『パーシパエー』【本断片】。このような短音化にはアンティバエヌルティマに鋭アクセントを置くことが付随するものだからである」。

【注】「転げ回って」の部分は一応コックの校訂に従って訳してあるが、文章が不完全なので確たることはいえない。また「妻」としたのはパーシパエーがミーノースの妻だからであるが、これも形容詞(ないしその名詞への転化)の一語だけなので断定はしがたい。なお、出典中の島名ミーノアはメガラの外港ニーサイアに近い島の名であるが、ミーノースがエーゲ海域に勢力をふるったという伝説を反映している。

二九

《サルドー *σαρδός*、『パーシパエー』ではスプラーギース *σπραγίς* がサルディオンの *σαρδίων* と呼ばれている(ともに印章、はんこの意味)》。

〈出典〉ヘーシユキオス σ 二〇六。著者名は省かれているが他に同名の劇を書いたものが知られていないので、たぶんアルカイオスの作品であろう。

作品名不詳断片

Incerta

三〇

私は多足の生き物(蝟)のようにわが身を食っている

〈出典〉アテーナイオス七・三二六C。

【注】アリストパネス『蜂』二八六以下に「そのようにわが身を食って、旋毛を曲げるのはおやめなさい」とあるように、「唇を噛む」とか「わが身を食う」は内向した怒りの表現である。

三一

《ピアサイ *piasai*。ピアサスタイ *piasasthai* の代わり。アルカイオスが「能動形を使って」「彼は私の妻に暴行した」と。》

〈出典〉『反アッティカ主義辞典』八六・一。

【注】ピアサイとピアサスタイはそれぞれ「強制する」「暴行する」の意味の動詞ピアソー *piaso* のアオリスト能動形不定法と中動形不定法】。

三二

《アルカイオスには *ἡ γυναῖκα* (女(妻)よ) という表現もある》。

〈出典〉『アルファベット順ホメロス語彙分析』。

【注】 *γυνή* (女、妻) の呼格は *γυναῖκα* だが、主格と同形の場合もあるということ。もっとも、主格を呼格の代用とする例は他にもある。

三三

《キュナリオン *κυνίων* (犬) の縮小辞は) キュニディオ *κυνίδιον* だけでない。アルカイオスが喜劇で》。

存疑

Dubia

三四

彼(女)はあなたを欺いている……

〈出典〉アリストパネス『鳥』一六四八への古注(ディアバツレスタイ *diaballasthai* という動詞について)「ホメロスのパラブレーデン・アゴレウオーン *παρὰβλήδην ἀγορεύων* という句もこれにほぼ同じである。また、アルカイオスの【本断片】も」。

【注】「欺いている」としたのは、パラバツレタイ *παπαβαλλεται* で、基本動詞であるバツロー *βαλλω* の意味は「投げる」。ホメーロスのパラブレーテンなる副詞は最新の注釈書 (Kirk, *The Iliad, a commentary*, vol. I p.333 (Cambridge 1985)) で「狡猾に、抜目なく」と解されているが、「挑発するように」ところの解釈もあり (Leaf: *The Iliad of Homer*, vol. I p.340 (London 1900))、古来議論の種となってきた語彙である。カークの解釈はパラバツレタイが「欺く」を意味するヘーロドトス、トゥーキューデーデースを裏付けとしているのに対し、この動詞が人を挑発するの意味で用いた用例は辞書に見つからない。この箇所は抒情詩人アルカイオスの断片四四五にも挙げられているが、恐らく喜劇詩人の作品からとされる。

三五

《クナポス *κνάπος* 「梳櫛」。コー *κω* からカプトー *κάρτω* が生じるように、クノー *κνω* 「掻く、削る」からクナプトー *κνώπτω* 「梳く」が生じる。動詞派生名詞がクナポス。真新しい(?) 布の表面を掻いて加工するのに用いる、刺の多い植物〔薊〕を指す。アルカイオスが、「大きな梳櫛の回りをぐるりと一回転しないよう」と》。

〈出典〉『真正語源辞典』。

【注】この箇所も抒情詩人アルカイオスの断片三八九に挙げられて

いる。コーとカプトーはカオス *κᾶος* 「空虚」と関連するといわれるが不明。アルカイオスからの引用箇所は意味がとりにくい。クナポスは梳櫛に似た形態の拷問用具、ないし処刑具を指すこともあるので、ここはその意味に関連するかもしれない。

三六

《シキユオス *σικύος* 「胡瓜」について) アッテイカ方言では常に三音節であるが、アルカイオスはシキユース *σικύος* という主格形から「胡瓜 (*σικύων* 複数属格) をかじる」という。スタキユース *στάχυς* (穀物の穂) の属格がスタキユオス *στάχυος* であるように》。

〈出典〉アテーナイオス三・七三E。

【注】本断片は抒情詩人アルカイオスの断片四四六に挙げられている。σικύος からの複数属格なら *σικύων* となってアクセントが異なる。第二変化名詞と第三変化名詞の混同の例である。

三七

《アラゾーン *ἀράζων* 「無宿者」。放浪者のこと。アルカイオスに用例がある》。

〈出典〉『スーダ辞典』α一〇五八。

【注】抒情詩人アルカイオスでは断片四〇三A。アラゾーンは通例「ほら吹き」の意。

三八

《『オデュッセイア』七・一〇四のメーロパ *μηλοπα* [林檎のように見える] という語について) ホメロス以後の詩人の中には、メーロン *μηλον* [林檎] をドーリス方言にしてメーロン *μηλον* としたり、オプシス *ὄψις* をエイドス *εἶδος* (この場合ともに「外見」の意) に代えたりして、措辞に変更を加えた者がいる。喜劇詩人アルカイオスはその一人で、彼はある男を揶揄し、頬に紅をさしてめかしこんでいるという理由で、エイドマーリデー *ειδομαρίτης* と形容したが、これは明らかに恥じて顔を赤くすることを喜劇的に表現したものである》。

〈出典〉エウスターテイオス『オデュッセイア注解』一五七一・四三。

【注】メーロンは林檎を指し、ときに人間の頬を意味することもある。メーロパはメーロプス *μηλοψ* の対格であるが、これはメーロンとオプシスの語根との複合形容詞であり、『オデュッセイア』の該等部分では穀物を形容する語として、「林檎の色」すなわち「黄色の」の意味に解されている。他方、アルカイオスが用いたとされるエイドマーリデー *ειδομαρίτης* という語は頬の赤らんだ色に関連するらしいが、スウェートニウス『悪口雑言集』六三ではこの語を、「身を持ち崩し男色を売る男」に対する罵声であるとし、その理由を

「頬紅を用いて」頬を美しく染めることから」と説明している。この点ヘーシユキオスと二二五に、イドマーリタイ *ειδομαρίται* という語を「顔に化粧する男たち」の意としているのと軌を一にする。

三九

《取っ手が一つの酒杯にコテュロス *κότυλος* というものがあり、これについてはアルカイオスも言及している》。

〈出典〉アテーナイオス一・四七八B。

【注】アテーナイオス第一巻は専ら杯の各種名をほぼアルファベツト順に並べて蘊蓄を傾けた巻となっている。抒情詩人アルカイオスでは断片四一七。

四〇

《メトレーサイ *μετρησαι* [測る]。アリトメーサイ *αριθμησαι* [数える] の意味で。アルカイオスが〔使用している〕》。

〈出典〉ポーテイオス二六四・一三。

アルケーノール（前四世紀）

AKKHNOI

レーナイア祭の入賞者を記した刻文中に、シノペーのディオニューシオスの四つあと、メナンドロスの三つ前にアルケーノールの名が挙がっていることから僅かに年代が推定される以外、彼について知られていることはなく、また断片はおろか作品名も残っていない。

アルキメネース（前五世紀？）

AKIMENHS

『スーダ辞典』 α 一二八四に「アルキメネース。メガラの悲劇詩人。また、別にアテーナイの喜劇詩人アルキメネースもいる」とあり、大ディオニューシア祭の喜劇入賞者を記した刻文中の欠損部分にアルキメネースの名を推定しようとする試みがある。やはり、断片、作品名ともに伝わらない。

アレクサンドロス（前二〜一世紀）

ALEXANDROS

前二〜一世紀の喜劇詩人アレクサンドロスについては断片数に比べて多くの証言が残っている。デルポイ関係の刻文から、彼がアリストーンを父とするアテーナイの喜劇詩人であり、紀元前一〇〇年前後、一〇六／五年と九七／六年の二度にわたって、アテーナイからデルポイに派遣される使節団の長かつ演劇団の責任者であったこ

とがわかる。一〇六／七年の分については、使節団員の一人に悲劇詩人アリストーンの名が数えられることから、これをアレクサンドロスの父とする説がある。ただし、父の名が別の刻文ではアリストイオンとなっている。

『ディオニューソス』

ΔΙΟΝΥΣΟΣ

『ディオニューソス』という題名の喜劇を書いた詩人は多い（マグネース、エウブローロス、ティーモクレース）。他に『船に乗る（ノウアーゴス）ディオニューソス』（アリストパネス）、『名人（？）ディオニューソス』（アリストメネース）、『ディオニューソスの誕生』（ポリュゼーロス、アナクサンドリデース）などの題名が知られており、また『舟に乗る者（ノウアーゴス）』（エピッポス、パラモノス）も、あるいはディオニューソスを指したものかもしれない。

—

A、ほら、鏡だ。これを何に使うのかね？

〈出典〉ホメーロス『イリアス』一・二一六への古注 α （クレー ν $\chi\omicron\upsilon\eta$ ）「くねばならないの意の非人称語」について「鋭調語であって統辞上重アクセントが付されるとき、この語は「くねばならない」の意味である。……曲アクセントが付されるのはアッティカ風の言い方。なぜなら、クローマイ $\chi\rho\omicron\lambda\mu\alpha\iota$ 〔使用する〕から派生す

る第二の語(二人称単数)は、共通語ではイオニア風にクラール *κραρ* であるのに対し、アッティカ方言ではクレール *κραρη* だからである。例は、アレクサンドロスが『ディオニューソス』の中で【本断片】と】。

【注】断片の後半はヘルマンの校訂による。だが、この校訂は劇において対話部分に主として用いられる韻律(イアムボス・トリメトロス)に合わせるためで、写本にある語順でも他の韻律(コーリアムボス)には合う。意味上の違いはない。

アリストパネス『テスマボリア祭の女たち』一三四行にある、「この女みたいな男はどこから来た。国はどこだ。この衣はなんだ」という台詞は、同古注からアイスキュロス『エードーノイ』(散逸)からの引用であることがわかる。『エードーノイ』ではこれが、捕えられたディオニューソスをリキュールゴスが侮辱する言葉となっている。『テスマボリア祭の女たち』の以下の部分は男のような女のようなアガトーンの姿を難詰する場面であるが、『エードーノイ』からの影響は数行に及んでいるかもしれない。『テスマボリア祭の女たち』一四〇行には「一体全体、鏡と剣と何の関係があるのか」とあり、鏡と剣とはそれぞれ女らしさと男らしさの象徴とされている。アレクサンドロスの『ディオニューソス』がどのような文脈に属するのかわからないが、女性的な姿をとった神が本断片に何らかの形で登場した可能性は高からう。エウリーピデス『パツカイ』三三三行でも、ペンテウスはディオニューソスを「女のような姿をしたよそ者」と呼んでおり、同四五五以下では毛髪が長く色白である点に言及している。

『ヘレネー』

ΕΛΕΝΗ

ヘレネーがトロイア戦争の元凶となった絶世の美女であることはいうまでもない。同名の喜劇を書いた詩人にアナクサンドリデース、アレクシスがあり、またアレクシスは『ヘレネーの誘拐』『ヘレネーの結婚』『ヘレネーの求婚者たち』をも書いたとされる。悲劇ではエウリーピデースの『ヘレネー』が現存し、テオドクテース、シノーペーのディオゲネースが同名の悲劇を書き、また、ソポクレーズとティームシテオスが『ヘレネー返還要求』を書き、ソポクレーズは『ヘレネーの誘拐』をも書いている。ただしこれらの作品はエウリーピデースのものを除き少数の断片以外ほとんど伝わらない。アレクサンドロスの『ヘレネー』も次の一語断片のみである。

二

《エウオルケーシア *εὐορκησία* 「誓いを守ること」。アレクサンドロスが『ヘレネー』で(使用)》。

《出典》『反アッティカ主義辞典』。

『呑みくらべ(酒宴)』

ΠΙΟΤΩΣ

三

わたくしは明日までに笛吹き女を調達せねばなりません。

配膳係と料理人も手配するつもりでおります。

そのために主人が私を田舎からお遣わしになり……

〈出典〉アテーナイオス四・一七〇E「トラペーズコモス(語源的には食卓の世話人)」がトラペーズポイオス(同じく、食卓を調える人)と同じであるかどうか調べる必要がある。というのは、『呑みくらべ』と『二世』が『ギリシア・ローマ相似論』の中で、『呑みくらべ』という題名のアレクサンドロスの劇から次の一節を引いて、トラペーズコモスとローマ人のいうストルクトルstructorは同一であると述べているのだから。【本断片】」。

【注】断片中で「配膳係」と訳したのはトラペーズポイオスであり、一見、アテーナイオスの論旨がわかりにくいのが、アテーナイオスは出典引用部分の直前でマゲイロス「料理人」(ただし、本断片中の「料理人」はデーミウールゴスの訳)とトラペーズポイオスは役割が異なっていると述べており、ユバがトラペーズコモスとラテン語のストルクトルが同一である証拠としてトラペーズポイオスという語の使われた【本断片】を引用していることから、ユバはトラペーズポイオスとトラペーズコモスが同一であることを前提にしていると考えられる。アテーナイオスの伝承でこの部分に欠損があるとい

う説もあるが、この程度の論理的不整合性ないし曖昧さはそう珍しいことではないともいえる。ラテン語のストルクトルは食卓で料理を並べたり、調理した肉を切り分けたりする役の奴隷を意味する。アテーナイオスは続く部分で「食卓の世話やその他食事が整然と行儀よく行われること(エウコスミア)に配慮する者をトラペーズポイオスと呼んだ」といつているが、そのトラペーズコモスの同一性についてはこれ以上触れていない。

存疑

Dubia

四

〈プロキユテース *προκχυτης* は、シマリストスが『同意語辞典』第四巻で述べているように、酒杯の一種。……ピリータースの『不規則語彙』では田舎の人間が酒を呑むのに用いる木製の器となっている。アレクサンドロスも……でこれに言及している。〉

〈出典〉アテーナイオス一・四九六C。

【注】題名が書かれていた部分は壊れていて、『アンティゴネー』『ティゴニオン(遊女の名)』などを推測する説がある。

五

いたのは人が五人と女が三匹……

《出典》アリストパネス『テスモボリア祭の女たち』六八二「女たちと人々」への古注「アレクサンドロスの【本断片】と同様、滑稽に言ったもの。だからこれは喜劇らしい冗談としていわれたものである」。

【注】出典写本中「アレクサンドロス」は「アレクサン」と省略された形になっており、必ずしもアレクサンドロスと断定はできない。断片がかなり残っている喜劇詩人アナクサンドリデースの省略形に誤謬が重なったものと見る向きもある。韻律はトロカイオス・テトラメトロスで書かれているが、行末の短長の韻律が欠如している。「あそこ」という副詞を補う説や「三匹」を「四匹」として行末の韻律を完成させる意見もある。

六

《シムバルメノス *συμβολόμενος* 「協賛して」。この俚諺も省略的用法。「愛によせて」という語句が必要だから。この俚言にアレクサンドロスが言及している》。

《出典》『ポドレアン図書館蔵俚諺集写本』八五六。アテーナイオス一五・六九二Dに「キュテラの詩人」〔ピロクセノス。前五〇四世紀のディテラムボス詩人〕に倣って私も愛によせる歌を一節君たちに協賛することにしよう」とあり、同六・二七一Bにも同様の表現が見える。プラトーン『饗宴』一八五Cには「以上が私の……エロス神に関する協賛の言葉である」と述べられている。動詞部分だけで同様の意味に用いられるのは、俚諺というよりは決まり文句

とてもいうべきものであるが、事実上動詞部分だけでもしくは引用写本の分詞形で使用されている例は他の文献には見当たらないようである。これもアレクサンドロスをアナクサンドリデースに校訂する見解がある。

冒頭に述べたように、本ギリシア喜劇断片訳と注は一九九一年刊 POETAE COMICI GRAECI (PCG) Vol. II (Berlin) を底本としている。ギリシア喜劇断片集成としてはこれまで Kock 校訂の COMICORUM ATTICORUM FRAGMENTA (CAF, 1880~1888) が集大成として評価されてきたが、一九八三年以来、現在まで五巻発行されている PCG が、新発見の成果をも取り入れた最新にして最高の資料としての地位を確立しつつある。第一巻はまだ刊行されていないために第二巻から手を付けることになった。拙稿の目的は一般に知られていないギリシア喜劇断片を紹介し、時に断片数の多いものについては作品としての復元を試みることにあるから、多種多様な資料をすべて厳密な形で掲げることができない。しかし、頻出する著作で今回に現れたものの書名を以下に掲げておく。

- アテーナイオス『食卓の賢人たち』 Athenaei Naucratae Deipnosophistarum libri XV. (引用では書名を省略)
- ポージェイオス『辞典』 Photii patriarchae lexicon. (同上)
- ヘーシキオス『辞典』 Hesychii Alexandrini lexicon. (同上)
- 『スーダ辞典』 Suda lexicon.
- ポルクス『辞典』 Pollucis onomasticon. (引用では書名を省略)
- 『反アッティカ主義辞典』 Antiatikistes.